

2012 年度 第 4 回 全体研究会
「アジアで活躍する仏教指導者」 (第 3 回)

報告題目	親鸞聖人の目指した地平 ～フクシマ・ヒロシマの闇と光～ 震災後から戦争前夜へ
開催日時	2012 年 7 月 23 日 (月) 15 : 00－16 : 30
開催場所	龍谷大学大宮学舎 清和館 3 階ホール
報告者	岡本法治 (浄土真宗本願寺派 真宗学寮教授・広島仏教学院講師)
ファシリテーター	桂 紹隆 (龍谷大学文学部教授・BARC センター長)
コメンテーター	中西直樹 (龍谷大学文学部准教授)
参加者	176 人

【報告のポイント】

岡本法治師は、2011 年 3 月の東日本大震災に伴う原発事故の被害に遭遇した福島県民と第二次世界大戦時に原爆投下の憂き目に会った広島県民の苦悩（闇）を自らの聞き取りをもとに紹介した。そもそも生きていること自体が闇を抱えていることであり、そのような中において念仏、そして群生海という親鸞の目指した地平が重要となってくると述べた。

【報告の概要】

広島出身の岡本法治師は、広島仏教学院において浄土真宗について学び、真宗学寮の教授を務める他、「海と風と光の会」を設立し、社会問題、仏教徒の問題に関わってきた。また原発の設立反対運動も長年に亘って行い、最近では東日本大震災の被災地である福島や宮城の人々の広島への招待、そしてアルゼンチンやフィリピンでの仏教講座への出講など多彩な活動を行っている。師の今回の報告の内容は以下の通りである。

福島では震災以後、人口が 5 万人程減少し、県民は震災の直接的な被害を受けただけでなく、それに伴う原発事故によって意識自体も変化し、自らの「誇り」をも失いかねない状況（闇）に置かれている。不安や恐れは語られることなしに解消することはありません、戦時中に広島において被爆した人々の中にも、今日その体験を語るができずに福島県民同様に闇の中に身を置く者がいる。ただし、そのような闇は誰しもの足元に存在し、生きていること自体が闇を抱えていることであると言える。一人一人は、その闇と向き合う必要があるが、その勇気を与え、光へと導いてくれるのが、阿弥陀仏が側にましますこと



を意味し、明日を信じる力を与えてくれる「南無阿弥陀仏」を念えることである。そして同じく皆が繋がり合い、共に新たな場所を切り開いていくことを意味する「群生」という意識を持つことが重要となってくる。実際に、福島で現在行われている放射能の除染作業も人々の協力の一つの成果なのである。群生海、即ち命の繋がりの中で皆が共に歩いていく道があることこそが親鸞の目指した地平であり、これが現代社会に生きる人々の道を開く言葉である。

【議論の概要】

中西直樹氏は、岡本師の原発問題に際しての活動の報告が具体性を欠いていたこと、また近代以降において社会問題に対して日本の仏教者は消極的な態度を示していたことを指摘した。その上で、闇において光を導くべき仏教者はそのような事実を厳しく見つめることで仏教が果たしていく役割を追究することが必要なのではないかと述べた。

これに対して、岡本師は確かに近代以降の仏教の活動には反省すべき点があり、仏教が積極的に弱者の側につく本来の活動を行っていくには現代の寺院制度の問題も含めて考えていかなくてはならないと答えた。

またフロアからは、かつてのインドにおける仏教について改めて目を向けることによって、現代日本の仏教が抱える問題の解決策を探ることができるのではないかという意見が出た。

これを受けて岡本師は、今日インドにおいても仏教徒が再び増えてきており、群生海の体現をそこにも見出すことができ、そうした現代インドの仏教の中にも当該問題解決のため学ぶべきものがあることを示唆した。

